

21世紀の人口と開発戦略 —日本の役割—

国際家族計画連盟（I P P F）事務局長

ハルフダン・マーラ

平成元年4月18日

国際人口問題議員懇談会 国際協力部会
部会長 扇千景

扇部会長

お忙しいところお集りいただきありがとうございます。

すでに皆様にご案内のように私共がお世話になっております国際家族計画連盟（I P P F）の皆様がおいでになっておられます。

I P P Fとは長い間おつきあいをさせていただいておりますが、今まで事務局長を務めておられました、ウィラクーンさんに代わりマーラ博士が新事務局長に就任なさいました。本日は皆様方に新任のご挨拶にとわざわざおいでになられました。

マーラ博士は世界的にも重要な機関であります、世界保健機関（W H O）の事務局長を15年間勤められた方でございます。今度I P P Fの事務局長におなり頂いたということで、その経歴からみましてもすばらしいお話しが伺えるのではないかということでお迎えの意味を込めて会合を持たせて頂きました。

それでは、最初に私達にいろいろとご指導を頂いております国際家族計画連盟の会長のワディア女史からまず御挨拶を頂きたいと思います。当方の出席者の紹介は後でさせて頂きたいと思います。

ワディア会長

扇先生、国會議員の皆様方、友人の皆様方、同僚の皆様方、もう一度日本を訪れることが出来まして、大変嬉しく思っております。昨年も一度訪日をさせて頂きましたが、今回このような形で国會議員の先生方とお目にかかれることは、本当に嬉しく存じます。特に今、国会が混迷を深めているというようなお話しでしたが、そのような中でこの会議にお出で頂く時間をお割り頂きましたことは、私共にとりまして、大変光栄でございます。人口問題、家族計画、それから生活の質の向上ということを常に心掛けております私共にとりましては、大いなる励みになることでございます。

日本を訪れます度に、その進歩に目を見張る思いがいたします。毎日、毎年進歩を遂げているようです。私共にとりましては、そういったエネルギー、インスピレーションを少しでも吸収して、世界の他の場所にそれを役立てることが出来ればと念じております。

この会合の最初に、私はマーラ博士を御紹介するようにと言われましたが、マーラ博士程世界に知られた方を御紹介するというのは、大変な時間を要することですし、W H Oでの活躍振りなどは、皆様先刻御承知のことだと思います。扇先生からひとつご紹介がございましたので、マーラ博士のダイナニズムとか能力であるとかいうことを今更ここで申し上げることもないかと思います。

マーラ博士が IPPF の事務局長として就任することを承知して下さったことは、既に世界各国の政府によってよく知られておりますが、この大変素晴らしいニュースをこの場で報告させて頂くことを幸せに思います。そして彼のヒューマニズムとダイナニズム等を私共の活動に生かして下さることを約束して頂いたということを、重ねてここで御報告申し上げたいと思います。

もちろんマーラ博士は世界的によく知られた医者であり、それから専門家であるわけですが、ひと言だけ申し上げておきますと、結核を長いこと手掛けられた専門家でいらっしゃいます。第3世界において結核の撲滅に尽力をされた方ですが、インドにも10年間滞在されて力を尽くされました。従って、IPPFに対しても、単なる医学の知識であるとか健康に関する知識ばかりでなく、人類の開発の全体的な視野、洞察を与えて下さるものと思っております。

そのことに対し、アメリカの詩人である、フォルト・ウィットマンがおっしゃったことをここで引用したいと思います。「私が何かを与えるときには、慈悲を与えるのではなく、私のすべてを与えるのである。」という一節です。ですから、マーラ博士は IPPF に対してもその通りに、博士自身を私共に与えて下さるものと思います。

先程扇先生が御親切にもおっしゃって下さいましたように、私もこの活動に長いこと献身して参りましたし、創設者の一人であると同時に、現在会長を勤めてさせて頂いております。IPPFが1952年に創設されて以来、その活動には基本的な理念があります。そのことを申し上げます。

IPPFの創設以来、2つの目標があると思います。その1つは、個人、夫婦に対して、人権の一つとして家族計画の権利を促進すること。2つ目としては、人口の問題、資源の開発の問題、環境の問題等のバランスを取っていくことです。IPPFは、初め8ヶ国の家族計画協会から発足いたしましたが、今や127ヶ国、127の家族計画協会が加盟団体になっております。そして更に数ヶ国の協力を得ようとしているのが現状であります。IPPFのその理念として宗教を問わず、政治を問わず、開発のレベルを問わず、そしていかなる差別をもせずに人類の為、人間の為という目標で活動を続けております。この2つの目標を遂行していく上で私共は、非常に広範囲なビジョンを持っております。従って、私共が実行して参りますプログラムも大変多様でございます。その幾つかを御紹介させて頂きたいと思います。

まず、家族計画を一つの人間の権利として提唱していくことがあります。それから、色々な形でのコミュニケーション、教育等を行っています。また、人々に

対するサービスを提供するということですが、これは母親と子供の関係、健全な母親としての役割を果たせる為に、それから子供の権利、その他の分野での女性の開発等があげられます。例えば国によっては、識字率が非常に低いところもあります。そのような国に対しては、教育を行い、識字率を向上させるとか、収入を生むような、技術を修得させるというような形で、母親、妻としての役割りばかりなく1人の市民として女性が生活をしていくというサービスを提供しております。

また常に若者も私共の視野に入れておりまして、人口問題に対する教育、性教育、家庭生活における教育などをそのプログラムとして実行致しております。

I P P F のプログラムは今申し上げましたように、大変多様であります。各家族計画協会がそれぞれのニーズ、それぞれの認識に基いて活動を実施致しております。

もちろん私共は、国会議員の皆様方のような政策決定者とお目に掛かる機会もありますが、それと同時に草の根の活動している人達ともよくコミュニケーションを取っており、恵まれない人達の為にも活動しております。私共が活動するのは、どんな形であれ、常に恵まれない人達の為のものであるからであります。従っていつでもその政策決定の地位におられる方達に対して、御協力を仰ぐこと、それからまた色々な設備を提供して頂けるようにお願いしております。

I P P F の活動の最大の目的は母親の健康と子供達に対するケアということであります。いまでも非常に多数の母親が計画されない妊娠の為に命を落しており、子供達の生存を怪ぶむという状況があります。このような問題を、2000年に突入する前に、全世界で全て解決していきたいと思っておりますし、その為に多様な活動をしているわけであります。

人口と資源と環境のバランスについては、ここではこれ以上申し上げませんが、今新しく出現してきた問題であり、世界の関心事となっております。当然ながらI P P F も大いに関心を持っておりますが、これに関しては、国連の各機関、例えばU N F P A、それからその他のN G O の機関とも協力し、なるべく短時間に解決が見られるよう努力したいと思っております。それを実現することにより、人々の生活の質を向上させるということが出来るだろうと思います。こういう目的を達成する為にこそI P P F が存在するのだと思っております。ありがとうございました。

扇部会長

ありがとうございました。ワディア女史のお話しを聞かせて頂きました。御存じの通り、この国際人口問題議員懇談会では、人口の均衡なくしては経済的な効率も、或

は社会的構成も達成することは不可能だということからの集りでございます。I P P Fへの日本の拠出金は、I P P Fの総予算の約20%にも達しており、日本は今後のI P P Fの発展にとって極めて重要な立場にあると思います。私共はその為に努力して参りましたし、これからも努力して参りたいという意味も込めて、これからもI P P Fの活動が地球上の人類の為に大いに貢献して頂く、その為にもマーラ博士のような強力な方が事務局長として就任して頂いたということに対して敬意を表しながら、マーラ博士のお話しを伺いたいと思います。

マーラ I P P F事務局長

扇先生、田中先生、御列席の先生方、今日ここでスピーチをさせて頂きますことを大変光栄に存じます。ワティア会長、御紹介ありがとうございました。

まず最初にひと言申し上げます。日本は好むと好まざるとに問わらず、1990年代から2000年の先も経済的に世界のリーダーになるということは明らかであります。国會議員の先生方がこれから2000年に向けて、社会的、経済的に世界のリーダーになる日本の政策を形作る責任を持っておられると思います。本日は最初に、アフリカで最近経験致しましたことをお話し申し上げます。これから先はお手元の原稿を読みますので、よろしくお願ひします。

先日私は、カメリーン（アフリカ西海岸に面した連合共和国）中部の森の奥に住んでいるある家族に合う機会がありました。彼らは3人の兄弟とその妻たち、そして子供たち14人で、10年以上前に木こりたちが残していく木の合間にカカオを植えて、暮らしていました。

その時私が強く感じたのは、こここの家族は比較的楽な暮らしをしているにもかかわらず、非常なもろさを持ちあわせているということでした。彼らの生活は、市場の動向によって上下するカカオの値段と、妻たちの労働の上になりたっているのです。男たちはカカオの木を植え、その世話をしていますが、実を収穫し、家族の食料となる植物を植え、除草をしたり、取り入れをするのは全て女たちなのです。彼女たちは奥深い森の中から家まで収穫したものを持ち運ばなければならず、また十分な収穫があった時には、森をぬけて6マイル近くも離れた市場へ売りに行かなければなりません。

妻たちは皆30代で、すでに10代後半から子供を生み始めています。産んだ

子供の何人かは赤ん坊の時に死亡してしまいましたが、ほとんどは丈夫に育っています。ところが母親たちは、みな健康とはいえない状態なのです。

彼女たちは、夜明け前に起き出して朝食の用意をし、すぐに野に出かけます。一日中働いたあと家に帰り、また夜遅くまで水汲みや風呂たき、そして子供達の世話、料理や片づけものなどに忙しく過ごします。ようやく床につくのは、夫や子供たちが深い眠りについたあとという毎日です。彼女たちは言葉少なに協力を求めてきました。それは夫たちを説得して、彼女たちが診療所に行けるようにしてもらい、これ以上妊娠しないための手当てを受けたいというのです。

私は夫たちに、妻たちの水汲みや取り入れを手伝ってはどうか、また家族計画を実施して妻たちの妊娠に間をおき、健康を回復する時間的余裕を与えてはどうかとすすめました。ところが男たちはあざけるように笑い、「女が何のためにいると思っているんだい・・・」と言いました。この言葉で私は、男たちは、食料や水そして農閑期に必要な現金など、生活のすべてを女たちに頼って暮らしていることに気付いていないということがわかりました。ですから男たちは、彼女たちの健康状態を改善することには、ほとんど関心がないのです。

このエピソードはもう一つの教訓があると思います。

現在の我々の世界でも、多くの人々がこの森の家族と同じようなもろさを持っていて、生活と幸福は、環境の面でも、経済的、社会的な面でも、極端に圧迫されています。また多くの場合、ここの森の家族たちと同様に、人々の幸せは、女性の果たす役割りに依存しきっているのです。女性たちの役割りは、中心的でないとしても実に重要なのです。しかも、私たちはあのカメリーンの森の男たちと同様、女性の力に依存しているという事実を無視しがちなのです。もっと悪いことは、女性たちの生活の最も基本的なニーズを充たさなければならないということすら気付いていないのです。

アジアの人々の生活も、アフリカの家族とそう違うわけではありません。中国でも、フィリピンやインドでも事態は同じです。これらの国の女性たちも、一人で何役もこなしていますが、社会のシステムが決して満足できる状態でないことを考えますと、彼女たちの自分の人生を決定する力が与えられているとは思えないのです。

日本の戦後の歴史をふりかえってみると、女性の権利が保障され、それによって

戦後の日本の社会で、女性が主要な役割を担なうようになって来たことがよくわかります。

その国の社会活動に女性の完全な参加がない限り、長期間にわたって国や社会の開発を継続させることが難しいのです。また女性たちが、自分の妊娠・出産を自らコントロールできるのでなければ、彼女たちが積極的に社会活動に参加することが困難なのです。

世界では毎年50万人の女性が、妊娠に関連した原因で亡くなっています。何と嘆かわしいことでしょう。また酷いことには、何百万人もの女性が、家族計画のサービスを受けられなかったり、その知識がなかったり、旧い習慣に縛られていたりして、望まぬ妊娠をしています。そして、よく面倒を見る事もできない程の間隔で、子供を産み続けているのです。何百万人もの女性に、自分自身の妊娠・出産のプロセスをコントロールするという基本的人権が与えられていないのです。この現実は、とても見過せるものではありません。

本日お集りの先生方は、こうした事情や数字については既にご存知と思いますのでここで繰り返すことはいたしません。ただ私は、家族計画を必要としている人々に家族計画の方法を提供できないために、多くの人々を悲劇に陥れている事実のあることをお伝えしたいのです。何百万の女性達が、過労と病気にさいなまれ、死と隣りあわせの人生を送っていることをです。

国際家族計画連盟（I.P.P.F）は、統計数字とそれらが物語る人々の実情について、各国政府や国際機関の注意を喚起し、先頭にたって活動してきました。I.P.P.Fをつくった人々は、女性の福祉が、無知と無関心の犠牲になっていることを許さず、現状を打ち破るための変革の推進者になることを選んだのです。そしてその一人が、他ならぬ日本の加藤シヅエさんでした。

世界の一部の地域で家族計画活動は成功していますが、そのことで私達は、情勢が好転しているかのような錯覚を抱きがちです。併し現実は、現在世界には家族計画を利用したいと考えている夫婦が3億組もいるのにこうした人々全てに家族計画を提供できないあります。更に悪いことには、夫婦たちや他の人々に対して、家族計画の機会を与えないようにするため、何百万ドルものお金が使われていることです。

家族計画に反対する人々は、「避妊は『生命を否定』することであり、避妊の多くは『中絶を行うこと』だ。」と思いこんでいるのです。

産む権利や、家族計画における人権、そして女性の健康と家族の幸せが大切なものだと考えるのであれば、これまでに積み重ねてきた努力の結果を覆そうとする人々の動きに我々は気付くべきです。今世界では、いたる所で悪意に満ちた勢力が、法的な手段に訴え、また感情的な戦線を張るなどして、女性の持つ産む権利を秘かにむしろんでいるのです。各国の立法機関に提出された妊娠・出産や家族計画、中絶に関する保健事業や、若者向けの家族計画に関する情報提供を制限しようとするものであることです。アメリカ合衆国では、学校での性教育の是非が法廷にまで持ち込まれていますが、こうしたアメリカでの動きは、しばしば他の国にも広がることを、私達はよく知っています。

また最近では、「家族を守るためにつくられた民間機関（N G O）」ですが、国際的または国内的な議論の場で、狭量な考えを打ち出しています。議論の対象は児童憲章から国際家族年、また女性の地位にいたるまで、あらゆることにわたっており、彼らに共通する関心事は、女性に完全な社会参加を可能にするような法的基盤を、打ち碎こうとすることです。

カメルーンの森の男たちと同様に、彼らは女性の選ぶ権利、健康を得る権利、家族計画に参加する権利を否定しようとしているのです。

今日私が、何故このようなお話をさせていただいているのかといいますと、今後10年、いや今後10世紀の間に、今地球が抱えている深刻な問題を開拓していく上で、日本の役割りが極めて重要であるからです。貧しい国々に対する日本の開発援助資金の増加や、日本の優れた技術力、そして政治的指導力は、女性の選ぶ権利を否定しようとする勢力や、家族計画を求める夫婦の知識やサービスを提供するのに必要な資金援助を止めさせようとしたり、通信活動や教育努力などを妨害しようとする勢力に抵抗していく上で、非常に重要なのです。また、家族計画活動は、開発のプロセスにおいて、大変重要な役割を持つものなのですが、その進歩の状況、或は弱点や長所を検討していく上でも、日本のリーダーシップが強く望まれています。

かつて変革を起そうとした人々がそうであったように、現代の私達も勇敢でなければなりません。そのお手本は、皆さんの偉大な先輩、加藤シヅエさんです。加藤さんが女性の権利と人間の尊厳を守るために傾けた熱意と、その献身的な活動から、私たちは学ばなければなりません。皆さん、人道的見地にたってリーダーシップを発揮して下さることを切に望みます。そして、政府のできない活動を担なっているN G Oへのご支援も是非忘れていただきたくないのです。N G Oは、女性の健康や家庭の幸福、そしてこの地球の生存を守ろうとして努力を続けているのです。皆さんのご協力が、世界の市場をより豊かなものにし、富める国も貧しい国も共に潤い、すべての人々の生活の質を高める努力につながっていくことを、私は信じております。

最後にひと言付け加えたいと思いますが、私の友人に、物理学者でしかも詩人がおり、最近彼が私に詩を送ってくれました。その中に書いてあることを引用したいと思います。「我々夢を実現しようと闘う者は、是非両極を一つにまとめる努力をすべきである。」ということです。その両極と申しますのは、日本等のように恵まれた国々の人々と、世界の人口の3分の2を占める、非常な貧困の中で生活をしている人々であります。この2つの両極を結びつけることが私に課せられた任務であろうと思います。ありがとうございます。

扇部会長

ありがとうございました。質疑応答に入りたいと思いますが、御出席の各議員を御紹介致します。

一 出席者紹介略 一

石本議員

すばらしい博士の御講演を頂戴頂きまして、本当に感激致しております。私共の国は人口対策につきましては、一応先進国だと言われておりますけれども、地球上には非常に多くの問題が出て参りました。飢餓に苦しむ多くの人々、併せて環境問題といいますか、地球的な問題も出てきまして、人口が増えていく、食糧の問題も起きてくる、砂漠化が進行するということで、一体どれを先にやつたらいいのか私自身、目下悩み続けているのが現状でございます。それにつきまして、ご意見をお伺い出来たらと思います。

マーラ事務局長

今の石本先生の御発言、正にポイントについておられると思います。私共の問題にとりまして、基本的に深刻な問題になっておりますのが、貧困の問題です。貧困の問題というのは、我々の地球を次の世代に渡す前に、解決しておくべきものだと思います。この貧困というのは、様々な局面で見られる状況であり、住宅、食糧、水の衛生子供の教育、男女を問わず収入を得る雇用を確保すること等です。いろいろな側面がありますが、現在、私共が多くの愚かなことをしているのではないかと思います。従って同時にそういう問題に取り組むことが必要だと、私は考えております。只今、石本先生がおっしゃいましたように、優先順位をつけるということは非常に難しいことだろうと思います。従って広範囲で取り組んでいかなければならないのでありますが、各国それぞれ違った優先順位を持って取り組まなければならないと思っております。

但し石本先生、必ずしも悲観的になる必要はないのではないかと思っております。例えば健康という枠組を設定致しますと、その中で優先順位をつけることが出来るのではないかと思います。健康という意味では、プライマリー・ヘルス・ケア、これがまず来るのではないかと思います。これは母親と子供の健康という意味で、非常に基本的な概念であります。そのプライマリー・ヘルス・ケアを供与致しますのに、途上国では1年で10ドルあれば済むのです。これは先進国の100分の1で済むということであります。従って、開発のどの分野を扱うか、つまり工業の分野なのか、住宅の分野なのか、教育の分野なのか。それを見極めて、政治家が適切なテクノロジーを選択するという勇気をお持ちさえすれば、2000年までに、貧困の問題、飢餓の問題そういう問題を解決出来るだらうと私は考えております。こういった意味で、日本は今まで途上国に対し、その国にとって、最適なテクノロジーをサポートすることを行って来られ、その意味でも大きなチャレンジだらうと思います。

扇部会長

ありがとうございました。残念ながら時間がなくなってしまいました。皆さん4時から会合をお持ちでございますので、またの機会にお目にかかるのを楽しみにしております。本日、こうしてお時間を取っていただいたことに、心から感謝を申し上げます。

配 布 資 料

マーラー I P P F 事務局長プロフィール
Dr. Halfdan T. Mahler

生年月日： 1923年	ヴィヴィルド（デンマーク）生
国 稷： デンマーク	（スイス在住）
経 歴： 1948年	コペンハーゲン大学 医学博士号取得
1950年	エクアドル国にて結核集団撲滅キャンペーン計画担当官として活動
1951年	WHO インド国・全国結核プログラム配属 上級係官として活動
1962年	WHO本部（ジュネーブ）結核班班長・結核についての専門家の諮問委員会事務局長
1969年	WHO システム分析プロジェクト主任
1970年	WHO 事務局次長
1973年	WHO 第三代事務局長就任 以降15年間歴任
1988年	WHO 名誉事務局長
1989年	I P P F 事務局長就任
名誉学位： 1975年	英國ノッティンガム大学、法学博士
1977年	スエーデン国ストックホルム市、カロリンスカ研究所、医学博士
1977年	フランス国トゥールーズ社会科学院大学博士号
1979年	韓国国立ソウル大学、公衆衛生学博士
1979年	ナイジェリア国ラゴス大学、理学博士
1980年	ペルー国リマ市国立フェデリコ・ビヤリアル大学名誉博士号
1980年	ポーランド国ワルシャワ医学アカデミー、医学博士号
1982年	チェコスロバキア国プラハ市チャールズ大学、医学博士号
1982年	タイ国バンコク市マヒドン大学、医学博士号
1983年	ベルギー国ガント大学、医学部、名誉博士号
1983年	ニカラグア国立自治大学、名誉博士号
1987年	ハンガリー国ブダペスト市センメルヴァイス医科大学名誉博士号
1988年	デンマーク国アルハス大学、名誉医学博士
1988年	デンマーク国コペンハーゲン大学、名誉博士号

名誉フェローシップ及びメンバーシップ

- 1974年 ベルギー熱帯医学協会準会員
1975年 英国王室医師協会の群集医学部、名誉フェロー^{*}
1975年 ニューデリーの「マラリアなど伝染性疾患に関するインド協会」
名譽フェロー^{*}
1975年 ジュネーブ医学会名誉会員
1975年 國際結核対策連合会名誉会員
1976年 ロンドン王室医学協会名誉会員
1976年 ウガンダ医師会名誉終身会員
1977年 フランス衛生・社会医学・衛生工学協会名誉会員
1979年 ロンドン衛生・熱帯医学大学名誉フェロー^{*}
1980年 バングラデシュ国ダッカ市内科・外科医師会名誉フェローシップ
1980年 ペルー国リマ市サンマルコ国立大学名誉教授
1981年 ロンドン王室医師協会フェロー^{*}
1983年 チリ大学医学部名誉教授
1983年 中国北京医科大学名誉教授
1984年 國際歯科連盟の名誉リストに掲載
1985年 アルゼンチン医師会名誉会員
1985年 ラテン・アメリカ医師会名誉会員
1986年 イタリア熱帯医学協会名誉会員
1986年 上海医科大学名誉教授
1986年 ロンドン一般開業医王室協会フェロー待遇

各種の賞及び栄誉

- 1974年 プラハ Jana Evangelisty Purkyne メダル（チェコ大統領が授与するもの）
1974年 チェコスロバキア国布拉チスラヴァ市のコメニウス大学ゴールド・メダル
1975年 イタリア対結核・社会的肺疾患連盟 Carlo Forlanini ゴールド・メダル、ローマ
1975年 ベニン国大栄誉章
1978年 オートボルタ国大栄誉章
1980年 コペンハーゲン Ernst Carlsens 財団賞
1982年 コペンハーゲン Georg Barfred-Pedersen 賞
1982年 セネガル共和国勲功大栄誉章
1982年 マリ国勲功賞

- | | |
|-------|------------------------------|
| 1986年 | フィンランド白バラ一級勲功賞 |
| 1986年 | デンマーク国 Hagedorn メダル及び賞 |
| 1987年 | マダガスカル国大授賞 |
| 1988年 | アイスランド国鷹大十字章 |
| 1988年 | ルーズベルト研究所から授与された「欠乏からの自由」メダル |
| 1988年 | 日本国勲一等瑞宝章 |

マーラ博士が IPPF 事務局長を引き受けることを決意するにあたっての発言

今回のこのポストは私にとって極めて個人的な意味で挑戦的である。私としては家族計画運動を一層強化し、家族計画が女性の健康にとって、子供達の幸せにとって、また全世界的に進められている開発への努力にとって、どんなに重要であるかを明確にするために私の残りのキャリアを費やしたいと考えている。

家族計画は開発の過程で大きな役割を果しているが、その家族計画では女性が演じるべき重要な役割がある。私たちは国際社会の利益のために、女性の身体的・社会的・精神的エネルギーが開放されるよう見届けなくてはならない。

ハインリヒス IPPF 本部理事会会長のマーラ博士評

家族計画運動を1990年代へ向けて統率して行く人物で、これまでその半生を国際的開発に関する諸問題との取り組みに捧げて来られた。それだけに、家族計画というものが女性や子供、そして全地球家族の健康と福祉のためにどんなにか重要であるかを実によく知つておられる人物である。

〔翻訳責任：（財）家族計画国際協力財団〕

出席議員

部会長 扇 千 景

田 中 龍 夫

石 本 茂

有 島 重 武

中 西 一 郎

林 道

武 村 正 義

高 木 健 太 郎

代理 佐 藤 隆

桜 井 新

矢 追 秀 彦

三 治 重 信

関 谷 勝 翠

原 田 昇 右 左

栗 屋 敏 信

谷 津 義 男

関 山 信 之

講 師 ハルフダン・マーラ 国際家族計画連盟 (I P P F) 事務局長

アババイ・ワディア I P P F 会長

バーナード・アルビハレ I P P F 事務局長顧問